

# 水の哲学

## アポリネール

### 「流れる水のように 恋もまた死んでゆく」

ギョーム・アポリネール（1880-1918）は亡命ポーランド貴族の娘を母としてローマで生まれた。父親は不明でシチリア王国の退役将校と推定されている。

少年時代をモナコ、カンヌ、ニースなどで過ごし、19歳のときにパリに移り住む。ピカソ、ルソー、ブラック、マックス・ジャコブらの前衛的な画家や詩人たちと親交を深め、1913年に出版した詩集『アルコール』と美術論集『立体派の画家たち』で新世代のアーティストの旗手となる。

第1次世界大戦が1914年に勃発すると砲兵隊に志願し、1916年に頭部の重傷を負う。戦傷が癒えると文学活動を再開し、シュールリアリズム演劇の上演や詩論『新精神と詩人たち』などで高く評価される。

1918年5月に結婚したものの、同年11月に当時流行したスペイン風邪で急逝。38歳の短い生涯だった。

#### マリー・ローランサンとの出会い

表題の「流れる水のように恋もまた死んでゆく」は『アルコール』のなかの「ミラボー橋」の一節。日本ではフランス文学者で詩人の堀口大学

による訳詩集『月下の一群』で有名だ。

その部分を引用すると――

流れる水のように恋もまた死んでゆく  
恋もまた死んでゆく  
命ばかりが長く  
希望ばかりが大きい

日も暮れよ 鐘も鳴れ  
月日は流れ わたしは残る

「ミラボー橋」は画家のマリー・ローランサン



への失恋をモチーフとしている。

アポリネールは1904年にピカソと知り合い、モンマルトルにある彼のアトリエ〈洗濯船〉で彼女と運命的な出会いをする。当時アポリネールは27歳の無名の詩人、ローランサンは22歳の画学生でお互い深く愛しあうようになるものの6年後に破局を迎える。

#### 喜びから失意に変わるミラボー橋

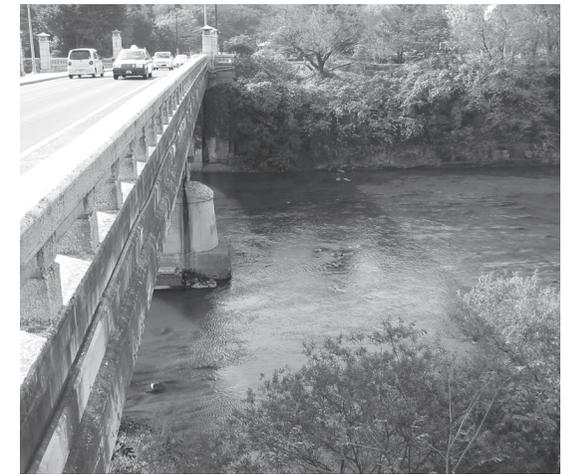
アポリネールの詩によってパリの観光名所となったミラボー橋は長さ173m、幅20mで1895年に完成した。橋脚の上には海の神々を表現した4体のブロンズ像が飾られている。

ここを舞台にした「ミラボー橋」は恋の喜びをセーヌ川に投影したフレーズで始まる。

ミラボー橋の下をセーヌ川が流れ  
われらの恋が流れる  
わたしは思い出す  
悩みのあとには楽しみが来ると

しかし後段ではセーヌ川の流れが時間の流れと共に失意の象徴へと転化する。まさに「流れる水のように恋もまた死んでゆく」のだ。

日が去り 月がゆき  
過ぎた時も  
昔の恋も 二度とまた帰ってこない  
ミラボー橋の下をセーヌ川が流れる



のちに「ミラボー橋」は歌手＝作曲家のレオ・フェレによって曲がつけられ、シャンソンの名曲として第2次世界大戦後の復興期における市民の愛唱歌となった。

#### 別れのあとの想い

ローランサンはアポリネールと別れてから画家として自立し、1914年にドイツ人画家と結婚した。そして第1次世界大戦の戦火を避けてスペインに亡命する。

軍隊に入ったアポリネールは1916年によくフランス国籍を取得する。しかし前線で2度の開頭手術を行うほどの重傷を負い、除隊後に知りあったジャクリーヌとの結婚半年後に急逝する。

彼の枕元にはローランサンが描いた「アポリネールと友人たち」が架けられていたという。葬儀にはピカソやジャン・コクトーら多くの芸術家たちが参列した。

スペインで訃報を聞いたローランサンは彼の死後、画家としての名声を高め、「ミラボー橋」の歌が流れるパリで1956年73歳で亡くなった。

埋葬は彼女の遺志に従い、白い衣装と手に赤い薔薇、そしてアポリネールの手紙が胸の上に置かれていた。

(高倉)